

七尾版「八十八ヶ所霊場」

～大覚寺とその周辺～

秋の気配を感じて

市内に「八十八ヶ所霊場」があると聞き、早速車を走らせる。国道249号線沿いの、のと鉄道笠師保駅から穴水方面へ向かい車で約5分。国道から田んぼ道に入ると、稲刈りを終えたにおいが漂い、懐かしさを感じさせてくれる中、「大覚寺」にたどり着いた。入り口の正面右側に建つ石碑には「北國八十八ヶ所霊場」(市指定文化財)と記されている。

八十八ヶ所霊場と聞き、四国八十八ヶ所(四国遍路・四国霊場とも呼ばれる)を思い浮かべた方も多いのではないだろうか。四国八十八ヶ所といえば、四国にある八十八カ所の弘法大師(空海)ゆかりの札所の総称である。修行僧が大師の足跡をたどって巡り歩く旅を始めたのがその原型とされる。江戸時代初期の頃から、僧侶だけでなく、庶民の間にも巡礼が流行するようになった。

信仰によって病気が治るともいわれ、ご利益がある地として全国的にも知られている。

四国と七尾の共通点

四国とは遠く離れた七尾。どのような関係があるのか。この霊場が開かれたのは大正15年4月。当時の大覚寺住職が四国八十八ヶ所を巡礼し、四国そのままの風景をうつして造り上げた。ここで驚くべき事実が2つ。一つは、四国のもと同じ方向を向けて石仏が配置されていること。もう一つは、四国の本尊の真下の土を特別に持ち帰り、石仏の下に埋められていることである。それゆえ、この霊場を参拝した者は四国を巡拝したと同じご利益があるといわれている。一般にも無料で公開されており、噂を聞きこの地を訪れる方も多い。



本格的なコース

山門のそばからは山道が整備されており、全長は約4キロメートルにもなる。全体をまわるには2時間から2時間半かかるが、足元に自信のない方には約30分で参拝できるコースも用意されている。個人で訪れる方もいれば、和倉温泉から観光バスで訪れる団体もいる。80歳を超える高齢の方で5時間以上もかけて熱心に参拝される方、自分で持参した杖を忘れて帰るほど元気な表情で帰る方もいるのだという。大覚寺住職の大洞敬二さんは「30年構想で再整備を考えている。訪れる方から喜んでもらえるよう、この霊

場を守っていききたい。多くの皆さんにゆっくりご参拝願いたい。」と話す。

道標は何を語る？

大覚寺から山側に向かって進むと、道路わきに一基の道標(市指定文化財)が目につく。道標には「右の方たつるはま道 みやの方なかしま道」と文字が刻まれている。みやの方とは菅忍比咩神社を指し、中島町奥吉田につながる「殿様道」を指しているものと思われる。長年にわたって人の行き来を見守り続けてきた道標を眺めると、長旅を経てこの



整備された山道

地で足を止めたであらう人々の顔が浮かぶようであった。



道路わきにある道標

観音さまの言い伝え

その先をさらに足を進めると、うっそうとした木々の先に、御堂と灯籠が見える。御堂の中には「木造聖観世音菩薩立像」(市指定文化財)が安置されている。普段は鍵が閉められているが、毎年8月9日にはお参りが行われ、その日は地域住民の手によって宴が盛大にとり行われるのだという。地域では「観音さまを盗人が背負って逃げようとしたがどうにも逃げられず堂前に捨てていった。」観音さまを大覚寺に移そうとして背負うと、急に体の自由が利かなくなり、仕方なく元の場所に戻すと不思議と体が自由に動くようになった」といった言い伝え

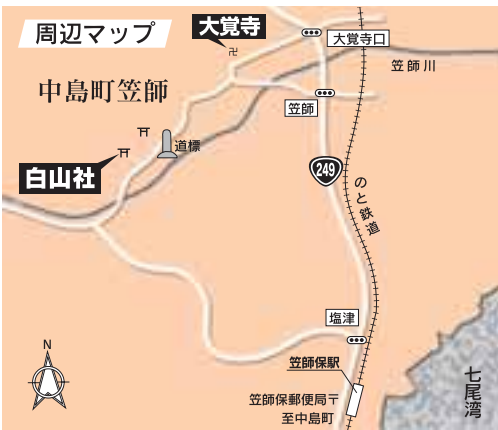


観音さまが安置されている白山社

もある。今では本当ともうそも言い難い言い伝えではあるが、観音さまがこの地で大切にされ続けてきた証に違いない。

過去を知り、今を知る

皆さんが住む地域にも古くから大切にされている「宝」がたくさんあるはず。今回訪れた中島町笠師保地区にある笠師保公民館では、大人はもちろん、子どもたちにも歴史を伝える事業に積極的に取り組んでいる。地域の過去を知ることが地域を愛することにつながり、地域を守り続けることの大切さを知る貴重な機会になる。過去を知らない現代の子どもたちに、伝えなければならぬことがまだまだ残っているのではないだろうか。



参考資料：七尾市の文化財、中島町の歴史と文化、笠師保の地区誌など